

「春が来れば思い出す」 山本の太郎

夫が死にかけている。今年で百二十歳。不老処置をしていない人なら寿命としては長くも短くもない。ついこの間まで一緒に旅行へ出かけたり、ワイン楽しんだりしていた。それが、突然しんどくなったと言ってベッドから出てこなくなった。以来、ベッドでずっと外を眺めては本を読んで過ごしている。

夫は私の顔を見ると「どうやら終わりが来てしまったようだ。ジーン、君と会えて人生が幸せになった」と言ってくれ。私も彼と巡り会わせてくれたことに感謝したい。老化していく彼と一緒に暮らしてきた。いつか訪れることだと覚悟していたつもりだが、別れの時が来るとやはり辛い。

多くの人は不老処置を受けている。体の遺伝子修復機能を活性化させる処置で老化をしなくなる。寿命に限りはなくなりずっと健康でいられる。一方、宗教的な理由や個々人の価値観で不老処置を受けない人もいる。彼はどうゆう理由で不老処置を受けなかったのかはわからない。わかるような気もするけど。

私は年をとる彼を慈しんだ。一緒に歩くと、昔は私の方が歩くのが遅かった。いつの間にか歩調のことは気にならなくなり、今は私が杖を付いて歩く彼を待っている。

「急かさないで老人を労ってくれよ」

歳は同じだからこれは意地悪だ。

「こうなることはわかっていたんでしよう。私を置いて行って

しまうあなたの方がよっぽど思いやりにかけているわ」

私を苦しめるつもりはないだろう。それでも彼がいなくなれば私はきっと落ち込んでしまう。彼がいなくなることに備えなければいけない。

死ぬ人が集まるところ。死ぬ人とは死んだ人もこれから死ぬ人も含まれる。病死も老衰も世の中から遠ざけられてしまっただ。けれども無くなりほしくない。それはどこかに放り込まれている。そこが火葬場だった。

日差しは強く、草木が生き生きと茂ってきた。上着をしまいサンダルに履き替え火葬場へ出かけた。

街の外れ。丘の上に黒く高い煙突が目立つ白い建物。街の動力網から外れているのか、大がかりな太陽光パネルや風車塔設備が建っている。

仕事を手伝いたいと申し出ると快く迎えてくれた。中の壁は白い石灰の漆喰で塗られ、小さな明かり取りの窓から射す光で十分明るかった。床は黒いタイルが敷いてある。天井は高く開放的。入ってすぐの部屋は広く木製のベンチが何列も並んでいた。他の部屋へ続く廊下がいくつもある。隣の部屋も広いが、その壁には大きな鉄の蓋が壁に埋め込まれて三つ並んでいた。これが遺体を焼く設備だと教えてくれた。

窯のある部屋の隣。作業員が使う広い部屋には、寛げるように壁にベンチが据えつけてある。もう一方の壁には、木で柵が作られていて緑のガラス瓶が並んでいる。反対側の壁は大きな窓で丘からの景色が見渡せた。部屋には、お茶を飲みながらくつろいでいる人がいた。眠ってる人、ベンチに座り込んでいる人。その人達と簡単に挨拶を済ませるとやることはなくなつた。

「仕事は何かあった時だけ。普段やることは無いのでゆっくりして下さい。ここにいる作業員は大体自死準備中です。私もですけど」と案内してくれたのはカーリー。若く見えるが物腰からして百五十歳は超えていそうだった。

「家にいると家族の面倒を見なくちゃいけないんだけど、キリがなくてね。逃げ出してきたのよ。気づけばやりたいことも無いし、みんなのように人生を終わらせようと思って」ここにいらしい。やることもないので、お茶を淹れ配って歩いた。挨拶をしたが無言の人も多かった。みな死にに來ていると思うと不思議な感じだ。ひどく落ち込んで見える人もいるが、生き生きとしている人もいる。その人はマキシンといった。

「趣味で絵を描いているの。見る？」と言って彼女が描いた作品の画像を端末で見せて貰った。華やかな色彩が迸った生命力に溢れる作品だった。

「とても引き込まれる絵だわ。何をモチーフにしているの」と興味を惹かれ尋ねた。

「抽象画だからモチーフはないと言えないかも。私の画題は動植物の生命だからお花がモチーフになることもあるけど、そ

それはそういう場合ね。ねえ、知ってる？ 植物は体の中にたく

さんの菌と暮らしているの。一本の木に見えるけど、実は何億という菌や細菌、虫やアメーバなんかと共存しているわけ。

アメリカのイエローストーンは火山がある国立公園だけ

ど、そこは火山が生きていて地面は百度以上にもなるし、間欠泉が熱湯を撒き散らしたりもする。植物にとっては地獄のよう

な環境なわけ。そこに唯一イネ科の植物が自生していて、その

植物は他にライバルがないから、その地域を独占できる。生

存競争では優位立っているの。そんな過酷な状況で生息できる

秘密は特殊な菌と共存関係にあつて、菌の効力によって他の植

物では死んでしまう環境でも生きていけるの」

マキシンは最後に「どう思う？」と付け加えた。何を聞かれ

ているのかしら。返答に困っていると、後ろから人にぶつから

れた。男の子に見えたが、それは太っているせいだろう。マキ

シンが注意してくれた。

「ニブス！ ちゃんとジーンに謝りなさいよ」と大声をあげる

とカーリーが何事かとあらわれた。ニブスは興奮してマキシ

ンに食ってかかったが、カーリーが間に入った。マキシンは怒っ

ていたが、カーリーがニブスの肩を抱き一緒に廊下の奥へと

行ってしまった。マキシンはニブスについて教えてくれた。

「ニブスはいつか死ぬのが怖いらしいの。雷に打たれるとか幽霊に襲われるとか。そんな嫌な目に遭う前に死にたいらしいの

よ。だからたまに自暴自棄になって暴れちゃうの。ごめんなさいね」

あなたが謝ることはないよとマキシンにお礼を伝えた。なるほど、ただ座っているだけに見えるが皆何かしら事情があるみたい。

それから数週間。火葬場に通っているんな人と話をした。

バーデイは歯が痛いから死にたいという。

「歯が痛いなんて珍しいわね？ 再生できるでしょ？」と誰かが聞いた。

「原因はわからない。でも、右側の上の奥歯が痛むんだ。ずっと

と。歯課に何度も訴えたけど、なんでも無いって言われる。いつもどこで何をしても、シクシクと痛むのさ。こんな気持ち

は誰にもわからないよ」とバーデイは訴えた。確かに彼はいつ

も苦い表情をしている。しかし、皆が言うように歯の病気が原因ではないだろう。老化処置を受けていても虫歯を患えば確かに痛い。けどそれは治療をすればすぐ治る。培養した歯に変えるだけなので、症状が長引くこともない。バーディーが煩わさ
れているのは歯の病気ではない。私には思いもよらない何かを内側に抱えているのかもしれない。それは他人が触れていいものか難しい。助けを求めているようにも見え、諦めて死を受け入れようともがいているようにも見える。

人間は減多に死ななくなったけど、人間社会の流動性という問題が新たに発見された。病や老化を克服できたのは、間違いなく人類の偉業といえる。けれど一方で、固定されいつまでも続く人間関係や逃れられないコミュニティからの圧力など、人間関係が与えるストレスが問題視されるようになった。また、社会を維持するコストの観点から、人口は厳しく管理され新しく人口を増やすコストは上がり続けている。人が死ねばその分社会の維持コストは緩和され、新しく子供を養う余裕が生まれる。社会における人的・コミュニティ的流動性の無さが人間に重圧をかけている。あからさまにはしないが、社会には人の死

を歓迎する空気があり、それは理由を問わない。自殺したい人間を止めるのは、そんな社会の空気にそぐわないと皆がどこかで感じ取っていると思う。火葬場はそういう圧力に弾かれた人が、最後に辿り着く場所に思える。

火葬場には内的な問題を抱え自殺を希望する人もいるが、カーリーのように満足して自分の人生を自分の判断で終わらせたいという意志を感じる人も多い。ここが柔らかく落ち着いた雰囲気に包まれ悲壮さを感じないのは、そういった人たちが持っている決意によるのかもしれない。火葬場では、ほとんどの作業が自動化され人が死なないとやることはない。そして、この街で人が死ぬことは減多にない。

朝にベッドの夫と一緒に朝食を食べ、昼は三日に一度火葬場に行く。火葬場に行かない日は、彼を車椅子に寄せ近所を散歩する。夜は早くに食事を取り、寝るまでの時間を話したり本を読んだりして過ごしている。話すことは思い出話や取りとめもないこと。ベッドから起き上がれなくなって初めてする話も多

かった。私の親戚に対しての人物評。嫌いな食べ物のこと。子供の頃の失敗談。好きな私の髪型について。

「長い髪の方が良かったの？　ちゃんと行ってよ、もう」

「今の髪型も魅力的だからね。出会った頃の背中まで真っ直ぐ伸びた髪で子猫のように落ち着きがなかった姿を思い出すよ。ちよつと目を離すとすぐにどこかへ行ってしまう。もう、ちゃんとした女性といえる歳だったのに」彼は笑ってそう言った。私をそんなふうに見ていたなんて。八十年以上も一緒に暮らしているのに知らないことは多い。

穏やかな日々が続いていて火葬場が死人の集まるところだと忘れていたある日、初めて火葬場での仕事があった。私が初めて火葬することになったのはマキシンだった。

突然で驚いた。マキシンは気分屋などころはあるが社交性が高く、私ともすぐに仲良くなってくれた。多趣味で、絵だけでなく料理や洋服にもこだわりがあつて誰よりも詳しい。活動的で毎日忙しくしていたから、自殺希望者ということをつっかり忘れていた。火葬場では、苦しまずに死ねる薬が配られる。使う場合は三日前に申請する必要があるがしない人もいるらし

い。マキシンは申請をしていなかったが、部屋の鍵は開いていたのですぐに発見された。遺書も残されており監視カメラからも不審な点は見つからなかったので、通常通り家族が呼ばれ火葬が行われた。

私はマキシンの体を洗い服を着せ棺に納めるまでを担当した。マキシンの家族は深い悲しみに包まれ、打ちひしがれているようだったが、取り乱している人はいなかった。棺に収めたあとは家族の後ろで火葬に加わった。いつも明るく接してくれたマキシン。ここであつたマキシンがどれほど素敵な女性だったのかを家族に伝えた。家での様子と違うのか戸惑っているように見えた。私の話は家族にとって慰めになるといいけど。火葬が終わりベンチの並んだ部屋で待つ家族のもとに、ガラスの瓶に収められた遺灰が届けられた。マキシンのお父さんが、集まった人にお礼を伝え皆静かに帰っていった。

気がつけばコートが必要な季節になっていた。夫の体調は変わらず、穏やかに残りの人生を過ごしていた。火葬場では、街で事故があり遺体が一体持ち込まれた。マキシンの時と違い、

遺族は心の準備がなかったのだろう。深い悲しみに暮れ取り乱した遺族も見受けられた。故人の生前の人柄はわからないが、多くの人に愛されたのだろう。残された人たちの悲しみが伝わってくる。誰もが老衰や病死を実感しなくなったことで、死は遠く曖昧になっているかもしれない。

カーリーの息子トゥートルズが現れ騒ぎになったこともあった。トゥートルズにとって火葬場は母親を誑かして家族から引き離す詐欺師の集団に見えている様子だった。「カーリーを家に返せ」と居合わせた人に詰め寄った。カーリーから話を聞いていた私たちからすると、これほど身勝手に乱暴な人だったのかと驚きが大きい。最年長のスミーが間に入った。

「トゥートルズさん。まずは落ち着いてお茶でも飲みましょう。私たちは何も隠してしませんし、カーリーをあなたから引き離す理由ありません」スミーは落ち着いてトゥートルズに話しかけた。カーリーはトゥートルズと会うことを拒んだ。

「ご覧になったでしょう？ 話ができる相手ではありません。私がいなくなって少しは反省しているかと思っただけ何も変わらない」とカーリーも興奮していた。スミーは仕方がなくトゥー

トルズに明日また出直すように言った。「私たちはカーリーの意志を尊重しますが、明日会えるように説得してみましょう」

トゥートルズは納得していない様子だったが引き下がった。彼がいなくなりほっとした空気が流れたが重くるしさは変わらなかった。皆で話し合い、まずはトゥートルズにカーリーを会わせることにした。その際、スミーはカーリーに何も言うなとい、トゥートルズにもカーリーは話を聞くだけだと伝えた。暴力を振るったりしないように皆が立ち会う中で、二人を面会させた。トゥートルズは興奮して喚き立てたが、カーリーはトゥートルズの顔を見据え何も言わなかった。スミーはトゥートルズを簡単に押さえつけられるほど体が大きい。そうじゃなければトゥートルズはきつと暴れていただろう。その日はカーリーさんが耐えきれずに席を立てて終わりになった。そんなやりとりが二週間も続いた。次第にトゥートルズの罵声は懇願に変わり、謝罪の言葉が漏れ出した。毅然とした態度をとっていたカーリーも次第に態度がほぐれてきたようだった。スミーは根気強く二人の間に立ち続け、一日だけでも家に帰ってみないかと提案してカーリーが折れた。トゥートルズがどう変わった

のかわからない。しかし、カーリーは見た目には変わりはないけれど、週に何度か家に帰るようになった。カーリーの息子の騒動はそれで収束した。

予期せぬ客に振り回されながら火葬場は冷え込むようになっていた。厚いタイツと毛糸の靴下を用意しなくては。そろそろ冬がやってくる。

雲が厚く空はいつも暗かった。冷たい風が吹き、夜には突風が窓を叩くので大きな音が鳴った。冬のある日。覚悟していたことだが彼は死んだ。

部屋を暖かくして美味しいお茶を淹れた。彼はベッドに私は椅子に座り、たくさん話をした。昔の話。彼と私で思い出は食い違っていた。

「君が道を間違えて真夏の山の中を八時間も歩かされたんだ」「確かに私のせいだけど、八時間歩いたのは山じゃないわよ」

そもその原因は、彼が珍しい魚料理をどこかで知って食べに行きたがったことが発端だ。船でしかいけない離島のレスト

ランが提供している地元料理をアレンジした珍しいメニューだった。

料理は素晴らしいものだったが、そこは交通の便が悪く島内を巡回するバスが唯一の移動手段だった。そのバスは観光客しか使わないので、オフシーズンは一日一往復。帰りのバスに乗り遅れたのは私のせい。まさか他に移動手段がないとは思わなかったから。仕方なく住んでいる人たちに声をかけたが、現金を持っていくかと聞かれ、ないという断られた。それで仕方なく島の海岸沿いに回り込んで港まで歩いたのだ。山ではない。それを説明した。「そう言われると、そうだったかもしれないなあ。今思ったけど、ホテルなんか泊まればよかったんじゃないか？」私が提案したそれを「そのうち通る車に乗せて貰えばいいだろう」と取り合わなかったのは彼だ。

思い出を掘り返すといろいろな出来事が出てくる。それを二人で埃を払い綺麗に磨いて並べ直す。どの思い出も愛おしい。思い違いはあっても彼の記憶はしっかりしていた。けれど、体の方はだんだん力が抜けていった。ぽつりぽつりと喋るよう

になり、そのまま眠るようになった。起きると自分はこの冬の間に死ぬだろうと言った。

「ジーン。最後まで君に面倒をかけてしまった。ありがとう、ジーン。」

彼が謝るなんて最後に珍しいものを見た。

風はやみ雲が晴れ空が明るくなっていた。窓の外で鳥が鳴いていることにしばらくの間気づかなかった。何事もなかったように春がはじまっていた。

夫がいなくなった実感のないまま。毎日が過ぎていた。

いつも通りに作ったソースが思いがけず美味しかった時、「ねえ、味見してみて」と呼びかけるが返事はない。夜に本を読みながら彼の帰りを待つ。ストーリーに引き込まれながらも帰りが遅いことにだんだんと腹が立って時計を見る。ずいぶん遅い時間で、怒りが心配に変わる。何かあったのかしら。不安を覚えながら、彼がもういないことに気づく。そして、その度に涙があふれる。もう二度と会えない。胸に空いた黒い穴に全てが吸い込まれるような絶望で頭の中が一杯になる。気がつけ

ば寝ているが、起きれば彼がないことを思い出した泣いてしまう。

誰か見ているわけでもないし、どうせなら存分に泣いてしまえ。心ゆくまでいつまでも、出来る限り大きな声で泣いてみた。

そういった日々はいつの間にか終わっていた。忘れようとしたわけでもないのに。

彼ならなんと言うだろうか。

「人間って面白いね。生存のために忘れる仕組みを備えてるんだよ」と言うだろう。間違いなく。

彼のことをどれくらい覚えていられるんだろう。試してみると彼は永遠にある。生きるのが嫌になればやめてもいい。きっと彼が待っている。その頃には髪も背中まで伸びているだろう。